

修善寺町史料第二集

# 伊豆修善寺町出口遺跡調査報告

—縄文時代中期集落の一形態—

1 9 6 4

静岡県教育委員会  
修善寺町教育委員会

# 伊豆修善寺町出口遺跡調査報告

——縄文時代中期集落の一形態——

## 1. ま え が き

北伊豆には従来から知られた縄文遺跡がきわめて多い。静岡県遺跡地名表(1961年刊)掲載のものだけでも206を数え、その後の増加を考慮すると、発見数は250を超える勢いである。しかしこれらの中で正式に発掘調査されたものは、三島市千枚原遺跡始め10箇所程度に過ぎない。しかも部分的発掘が多く、遺跡全般の様相を知り得る資料は皆無に等しい状態にあつた。この事は単に北伊豆のみでなく、静岡県東部の550を超える縄文遺跡全般を通じてもいえることであつた。こうした折に、修善寺町大野区において、農業構造改善事業の進展中、はからずも、これから述べようとする出口遺跡が発見され、その大要を知る機会に恵まれたわけである。

しかし、ブルドーザーの剖面下から次々と住居址が発見され破壊されて行く中での応急の調査であり、元旦直後の厳寒や人員集め等、極めて困難な条件下におかれ、十分な調査ができなかつたことは、まことに遺憾であつた。今後も修善寺町では同様の農地構造改善工事が続き、それと共に最初から調査される縄文遺跡も2~3予定されているので、別の機会にまた総合的に考究する機会もあることと思うが、縄文時代の中期の集落のあらましを知り得る貴重な遺跡であるから、とりあえず報告し、大方の参考に供することにした。

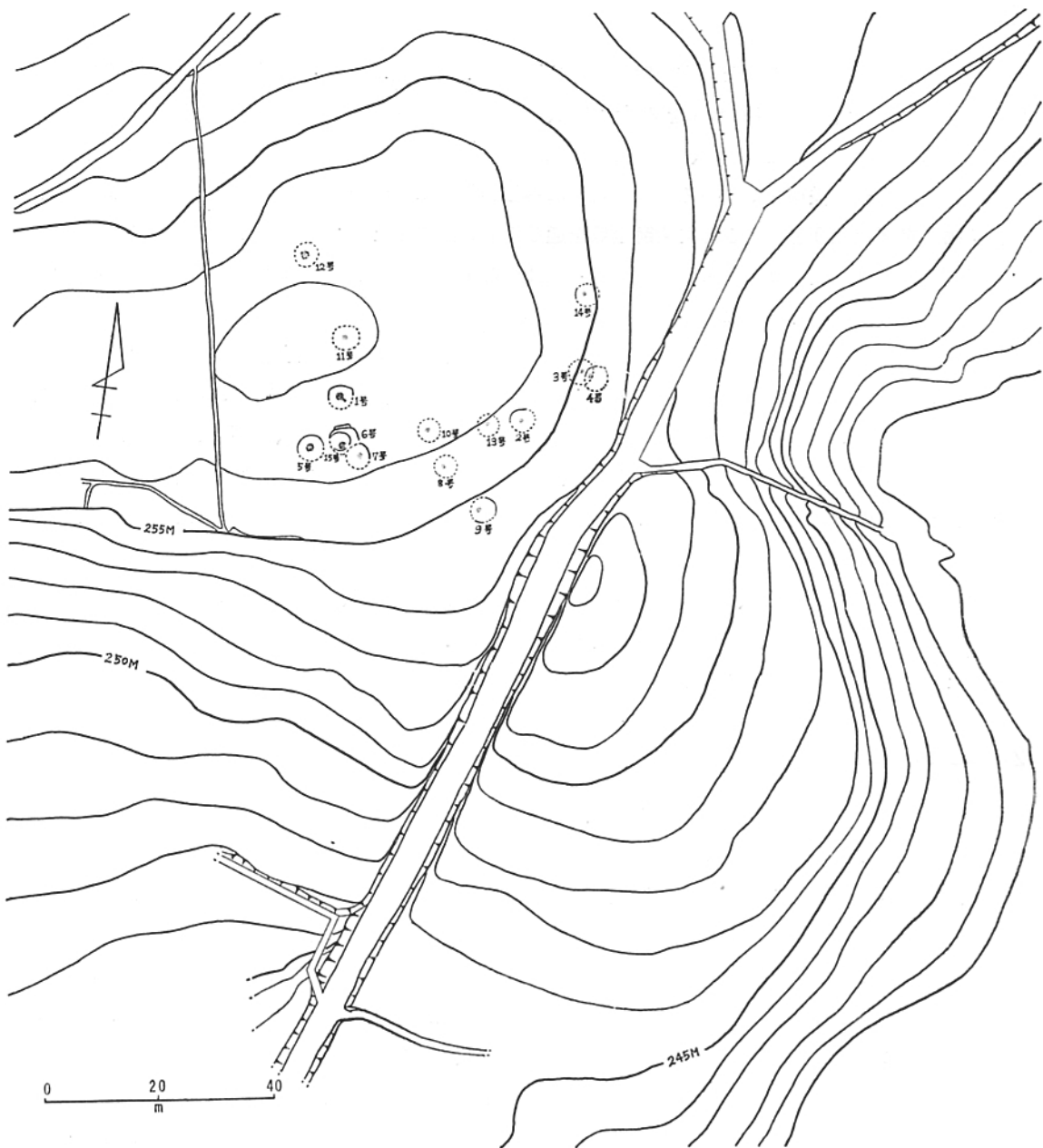
なお本遺跡調査に当つては、その発見者及び事実上の推進者として、物心両面にわたり献身的努力をされた長倉紫朗氏があり、また発掘・測量・製図・遺物整理と大変な努力を払われた尾形礼正氏の在在ことを明記して、その労に心より感謝する次第である。

## 2. 地 理 的 景 観

本遺跡は田方郡修善寺町大野字出口にあり、中伊豆の中心、修善寺駅(伊豆箱根鉄道)から東北方へ山中を登ること約5kmの地点にある。(第1図参照)大野区は狩野川の支流である大野川に沿つて展開し、幾つかの小部落に分かれているが、その中で最も奥地に当る山ノ畑部落の東北高所に出口遺跡が立地している。標高265m付近、周縁は山景のみで、きわめて静かな環境の中に存在している。遺跡の占地するこの大野丘陵は、宇佐美火山の西斜面にあり、雨水の侵蝕による深い谷間に挟まれた放射状丘陵の一つである。方向は東北より西南に向かい緩やかに傾斜している。丘陵上はかなり広く、「大野」の名にふさわしいが、大小いくつもの起伏があり、その凹地の一つには「小池」の名がある如く、湧泉も見られる。水は集落立地の上で最も重要な因子であるから、この湧泉と付近の遺跡との関連はきわめて深い。凸部、すなわち「ふくらみ」をもつた地域には、それぞれ遺跡が存在し、いずれも縄文時代のものであるが、出口遺跡もその一つとして存在している。東側の凹地を越えた向う側の「ふくらみ」には、湧泉に近く沖原遺跡があり、南側の凹地を越えた丘陵の上にも菅ヶ沢遺跡がある。後者からは早期の遺物も発見され、三遺跡中最も古い。

出口遺跡のある「ふくらみ」は250mコンターを基底として、直径160m程度の広さをもち、遺跡はその中央部よりやや東南寄りに存在している。この東南斜面に位置することは当然日射との関係を示すものである。

遺跡の南側に続く山ノ畑部落は多く南向きか東向きに建てられているが、これは年間を通じ北風の多く吹く地域性と併せ考えて先史時代の住居の入口を考える上にも重要である。



第2図 出口遺跡の地形と住居址の分布状態

本遺跡の成立年代は後述する如く、ほぼ縄文中期後葉といえるが、修善寺町内では同時期の遺跡が狩野川の河岸段丘上にも存在し、柏久保遺跡（標高70m）、本立野遺跡（同80m）、上大塚遺跡（同95m）のように100m以下の低所に分布している。したがって当時の水位が仮りに今日よりやや高かつたとしても、柏久保遺跡等と出口遺跡の標高差は不変であるから、当然河岸低地集落と、丘陵山村集落が存在したわけで、このことは後者に属する出口遺跡の性格を考える上に重要である。

本遺跡の地質は基盤が火山灰の堆積した厚い赤褐色のローム質土壌で、その上に黒褐色の腐蝕土が、ところにより20~40cm堆積している。遺跡の構成要素をなす住居址は、この黒褐色腐蝕土層（表土）がある程度堆積していた時に作られたもので、その竪穴の床面はロームを10~30cm削って作られている。丘陵上には石塊がほとんどなく、住居址の炉や石器に用いられた石材は、多く南方を流れる大野川付近より採集されたものと思われ、石質は多く安山岩である。黒耀石の産地である伊東市と中伊豆町との境界にある冷川峠や、中伊豆町筏場にも比較的近く、狩猟用の石鏃等にも概して不自由しなかつたろう。遺跡の東北方から西方にかけては深い森林地帯をなし、当時は遺跡の周縁にも多くの鳥獣が棲息していたことであろう。

今日ではタバコ、甘藷、麦、とうもろこし等の栽培される畑地となつていますが、昨年（1963年）の暮より農地構造改善工事を起し、牧草と乳牛による酪農地域に転換されようとしている。

### 3. 調査の経過

本遺跡付近はかなり古くから、石器や土器の出土地として知られ、戦前には井出太郎氏が踏査されて、「静岡県郷土研究」第8集に奥原遺跡として紹介されている。また同じ修善寺町内に住む長倉紫朗氏も、早くからこの地を訪れ、遺物を蒐集されると共に小池遺跡の名で呼んでいた。その範囲はいずれも沖原、出口、菅ヶ沢の三小字に及ぶものであつた。小野も又昭和36年中、長倉氏の案内で地元の相原隆三氏と共に、この地を検分したが、遺物を多く散布するのは字沖原の地域で、出口・菅ヶ沢の両地域は余り芳しくなかつた。結局沖原が主体をなすものと見て、他の二つは独立的遺跡としては認めないまま、さらに2年余を経過したのである。

しかし昨年の暮から始つた大野地区の農地構造改善工事により、この出口地域から独立した集落跡が発見されて、始めて別個の遺跡として取扱うことになつたのである。この集落跡発見の動機は、今年（1964年）正月元日にこの地を訪れた長倉紫朗氏が、ブルドーザーによつて、削り出された山肌より、石囲いの炉址や焼土を発見し、その付近より多くの石器や土器片を採集したことにはじまる。この地で工事の始まることは予知していた長倉氏であつたが、こんなに早く、しかも大規模に行われていたことは予想もしなかつたわけで、早速翌2日の夜、小野宅に電話連絡があつたのである。こうして3日の朝長倉氏と小野の現地踏査に基いて、正式調査の必要を生じ、同町内の尾形礼正氏の協力も求め、さらに小野から三島在住の長田に連絡し、緊急に調査実施の方針が打ち出されたわけである。

4日からの調査経過は次の通りである。

1月4日

朝9時半に修善寺駅に集合。緊急調査のため調査団の組織も十分でなく、参加者は地元の長倉紫朗・尾形礼正両氏、それに日大の石谷紘一・内田敏明両君、武蔵工大の渡辺高文君、大仁高校の漆畑君以下生徒数名にすぎなかつた。調査の指揮は本日小野が担当することとし、2台の車に分乗して現地

に向つた。

10時半より調査開始。まず昨日確認した石囲いの畑をもつ住居址を第1号住居址とし、これより東方約35mの地点にある焼土のみの畑をもつ住居址を第2号住居址、さらにその東方15mほどのところにある同様の住居址を、第3号住居址として、調査に当ることにした。すでにブルドーザーにより表土を30~70cm削られているため、床面がある程度露出しており、調査は割合に楽である。しかし堅穴の側壁が削除されているところも多く、住居址のプランを完全に出し得ないのは残念である。両住居址共床面を追つて調査して行くと、土器片や石器類を次々に出土した。第1号址の方はすでに調査前に長倉紫朗氏により一部遺物が採集されていたが、今日も又柱穴から打製石斧が出たのを始め、多数の遺物が発見された。また第1号住居址の畑は方形に石で囲い、一部がブルドーザーで破損していたほかほぼ完全に近い状態で検出された。第2号址の方も本来石囲いの畑であつたが、一部は地主により耕作中に抜かれ、残部は今回の工事でブルドーザーにかかり、住居址内に散乱していた。

結局2住居址が本来は石囲いの畑があつたわけである。発見された土器片も縄文中期末に近い加曾利EⅡ式土器で、相互に共通した面がある。石器は第1号址より打製石斧、石棒、石鏃など、第2号址で磨石などが発見された。

第3号址からは柱穴2本が発見されたが、他は不明であつた。なお東側より一層低く、別個の畑址(焼土堆積)が発見され、土器も加曾利EⅠ式を出土して、3号址よりも古いことが判明した。

1月5日

午前10時10分、修善寺駅集合、長田以下14名が現地に向つた。

第1号、第2号両住居址の清掃を行ない、撮影実測を午前中に済ませた。

風には近くで活動中のブルドーザーに来て貰い、第1号、第2号両住居址の周縁を削り、表土の残部を剥ぎ取つて行つた。すると両住居址の南側から焼土や石囲いの畑址がいくつか発見された。しかし北側では皆無に等しかつた。とも角新発見の畑址を中心に住居址のプラン検出に努力し、まず第1号址西南方の第5号址に重点を置いて調査した。この住居址も石囲いの畑を持つものであつた。発掘の進行につれ、東壁に沿つてまた新しい住居址を発見、第6号址と命名した。これはもつばら加曾利EⅠ式土器を出土し、加曾利EⅡ式土器を出土する第5号址等よりもやや古く、規模も大きいものであつた。夕刻までに中央より南に寄つて石囲いの畑も検出された。しかしこの第6号址の西側に重なつて第7号址も発見され、調査の重要性を感じた。なお建設省勤務の山田繁治氏により、第9号址(7号址の西南約25m)の調査が行われた。

1月6日

正月中の事でもあり、長田・小野・尾形3名共他用があるため、一日中休みということにした。しかし長倉氏は現地の見廻りに行き、かなり多くの子供達により遺跡がつかれているのを目撃した。新聞に報道されたためでもあろう。なお沼商生により長倉氏宅に1個の復原可能土器が届けられた。後に第12号址と命名された住居址のものであつた。

1月7日

朝10時半現地に集合。

今日は第5号、第6号、第7号各住居址の完掘に重点を置き、新しく参加した白石氏が第5号、尾形氏が第6号、小野が第7号を担当した。長田は全体の指揮をとりつつ第9号址の調査を行つた。第

7号址ではやや小規模な石囲いの炉を発見。第5号址では床面にささった完形に近い2個の埋没土器と、磨石1個（一つの土器に伴出）、第7号址よりは石匙1個が出土した。第9号址よりはごく少量の土器片しか出土せず、時期の判定も難かしかつた。炉には1個の石塊が見られたが、石囲いのあつたという積極的な証拠は見られなかつた。なお第7号と第9号の中間で発見されていた、焼土をもつ第8号住居址も調査した。しかしこれはブルドーザーによる破損著しく、遺物も少量で、どうやら加曾利EⅡ式土器を伴う住居址と推定された。このほか1号の北側から第11号住居址が発見された。

3時過ぎに3、4、5、6、7、9号の各住居址を清掃し、梯子を立てて俯瞰写真を撮影した。また第5号址は平面測量を終り、南北のセクションをとつたが、東西の分は翌日に繰越した。

この間渡辺君は全体測量を担当していたが一応の終了を見た。

本日の来訪者は修善寺町の教育委員長市川潔氏、同教育長三須完一郎氏、同町議土屋市平氏等で、有線放送の録音も行われた。

1月8日

10時より調査開始。今回は小野、長倉、尾形、石谷、内田の僅か5名による調査となつた。高校が始業式を迎えたためでもある。

第5、第6、第7、第9号各住居址の調査完了を目標に、石谷、内田両君は平板測量とセクション、長倉、尾形、小野は住居址の柱穴探しに全力を注いだ。いつになく冷く、調査の手も滞りがちであつたが、時には長倉氏提供の体内燃料（飲料）に力をつけられ、奮斗を続けた。結局第5住居址は柱穴が7本、第6住居址は6本、第7住居址も6本と判明した。しかし第6号址は床面に拡乱された部分が多く、各所に凹地ができるきらいがあり、調査は困難をきわめた。

第9号住居址からは6本の柱穴と、壁の一部が検出され、大体のプランが知られたが、第1号住居址ではどうしても柱穴が5本としか考えられなかつた。

3時すぎ第9号址の撮影と、西方委文山の中腹の松の木上からの遺跡全景写真を撮影した。

1月9日

今日は小野も登校し、現地では尾形、内田、それに修善寺町役場の鈴木和慶氏の3名のみが調査に当つた。現地は非常に寒く、僅かながらも雪が積つていたとのこと。尾形氏らは各住居址の実測を行なつた。

1月10日

発掘調査は一先ず終了せざるを得なくなつたが、尾形氏より電話連絡があり、本日まで実測を続けたとの連絡があつた。なお遺物整理の件で相談したが、今後の処理について詳細な検討をするため12日（日曜）に小野が修善寺に行くことに決めた。

1月12日

午前10時、小野は約束通り尾形氏宅に到り、居合せた大仁高郷土研究部顧問、奇二先生とも相談して、もう1日調査をすることとし、15日（成人の日）に実施することになつた。その際にはまた大仁高郷土研究部の生徒諸君数名の御協力を願うことになつた。次いで尾形氏と共に長倉氏宅を訪れ、遺物整理の打合せをしたが、結局復原可能な土器は長倉氏と尾形氏に復原を依頼し、各住居址の時期決定に必要な他の土器片は小野が整理することになつた。また石器の実測は尾形氏が担当することになつた。

1月15日

小野、尾形、奇二、長倉の4名と共に、建設省の山田氏、大仁高の漆畑君、結局6名で調査を行うことになった。

今日は調査の出来ていなかった第11号址と、その北方の第12号址（新発見、但し6日に沼商生により土器が発見されていた）の調査を行つた。11号址よりは2本、12号址からは2本の柱穴が確認された。また新たに第13号、第14号の両住居址を発見したが、第14号址からは柱穴1本と石鏃、小土器片（加曾利EⅡ式）が出土し、第13号は未調査に終つた。いずれもブルドーザーでローム層を削られ、床面上部を失つてはいいたが、炬（焼土）の底部が残つていたことから住居址と推定された。

第6号址の床面が腐蝕土とロームの混土層であり、中から遺物が出土する点、徹底的に追求することになり、混土層を除去して行くと、下層から6本柱の別の住居址が発見された。炬もほぼ中央部から発見されたが石囲いはなく焼土や炭のみであつた。出土土器は加曾利EⅠ式土器で上層のものと同じであり、同時期に建て直しの行われたことが推定されるに至つた。それにしても従前の堅穴を埋め、いわゆる張り床をして建てたということは理解しにくい点でもある。最初は上層の方を6A、下層の方を6Bとしたが、やはり後者を通し番号で第15号址とすることにした。

このほか山田氏が清掃し直した9号址柱穴内よりは磨石1個が発見され、第12号址でも床面より磨石が出土した。

こうして悪条件下ながら、一応本遺跡の調査をほぼ終つたのであるが、第10、第13両住居址が調査不十分であつたことや、第11、第14の各住居址が実測できずに終つてしまつたことは、かえすがえすも残念であつた。しかし冬休みをほとんどこの応急調査に使い果たしたことや、毎日調査員を車で運搬され、昼食を提供された長倉氏、精一杯活動された尾形氏ほか調査員の方々の努力や、工事を一時中止された地元の方々の協力を思えば、失われかけた遺跡を記録するために最善の努力を払つた心算である。

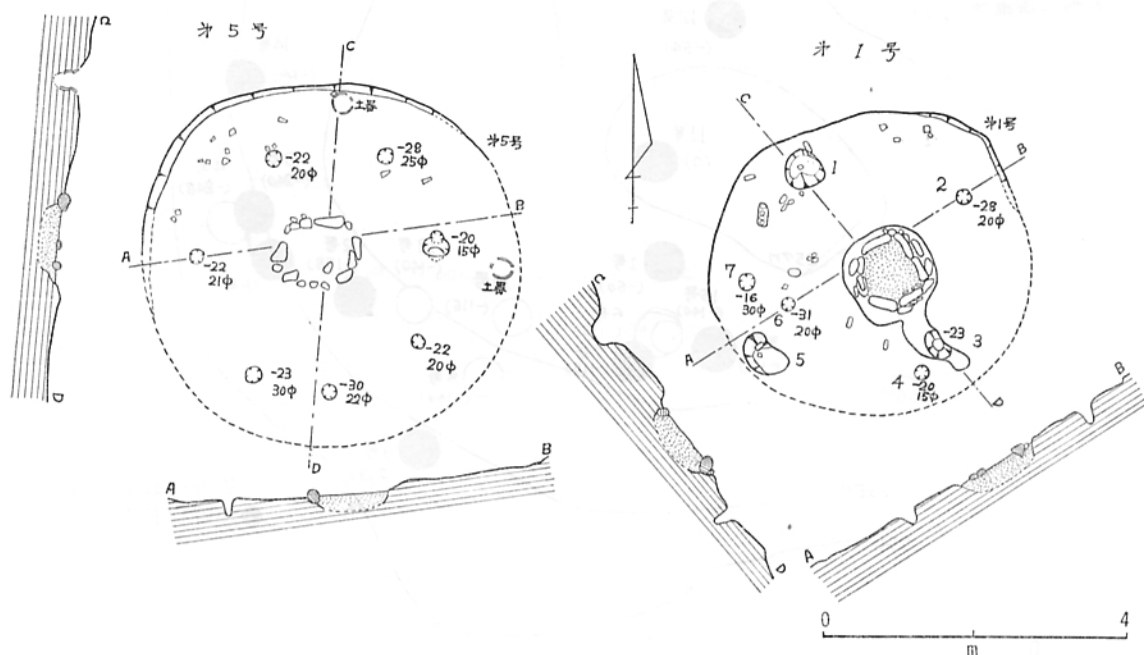
このあと1月末に長田、小野は長倉、尾形各氏と再調査を行い、残された住居址のレベル調査を尾形氏と沼津女子商業高校郷土研究部員2名の応援によつて実施した。

次に本調査に参加した人々の氏名を記しておく。

|                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 静岡県教育委員会社会教育課々長補佐 | 長 田 実                 |
| 沼津女子商業高校教諭        | 小 野 真 一               |
| 修善寺町文化財保護委員       | 長 倉 紫 朗               |
| 同                 | 尾 形 礼 正               |
| 沼津女子商業高校教諭        | 白 石 竹 雄               |
| 大仁高校教諭            | 奇 二 浩 児               |
| 建設省職員             | 山 田 繁 治               |
| 日本大学考古学会々員        | 石 谷 継 一               |
| 同                 | 内 田 敏 明               |
| 武蔵野工業大学学生         | 渡 辺 高 文               |
| 国学院大学史学科学生        | 長 倉 範 子               |
| 大仁高校郷土研究部員        | 漆 畑 稔、安 藤 初 枝、坪 井 幸 子 |

それにしても全体で20戸分を越えることはあるまいと思われる。発見されたこれらの竪穴を、出土遺物の上から観察すると、現在の知見から考えて、二つの時期に分けることができるようである。その一つは加曽利EⅠ式土器を主体にやや勝坂式的特徴をもつ土器を含む一群の時期で、他の一つは加曽利EⅡ式的な手法をもつ土器を含みながらも、やや後出の加曽利EⅡ式土器を主体としている一群の時期である。後者には第1号址、第12号址のように加曽利EⅢ式土器の要素をもつ土器も伴出しているので、前者との編年関係は自ら明らかである。新に第3、第4両住居址の場合、加曽利EⅠ式土器を伴う第4号址が下層に、加曽利EⅡ式土器を伴う第3号址が上層になって複合しているのは、その動かざる証拠である。これは第7住居址（加曽利EⅡ式）と、第6住居址（加曽利EⅠ式）の関係においても同様である。

こうした新旧二時期について、今回発見された16の住居址を分類してみると、確実な線では加曽利EⅠ式を主とする古いグループが4戸、加曽利EⅡ式を主とする新しいグループは10戸で、不明のものが2戸である。この不明のものは10号、13号で、いずれかと云えば、加曽利EⅠ式土器の小破片を若干出しており、他は見えないので、古いグループに属する公算が大である。新しいグループでも第16号住居址は床面が削られ、炬の発見がなかつたので住居址か否かが問題であるが、復原可能な埋没土器を2個出土したので、まず住居址と見てよいのではなかろうか。こう見てくると古いグループが多くて6、新しいグループが大体10ということになるが、実際には前者は若干多かつたかも知れない。それにしても数年、10数年ということになれば、建て直しもあろうから、前記の家屋が同時に必ずあつたとは断言できないわけである。第6住居址と第15住居址の場合などはその1例で、両者共加曽利



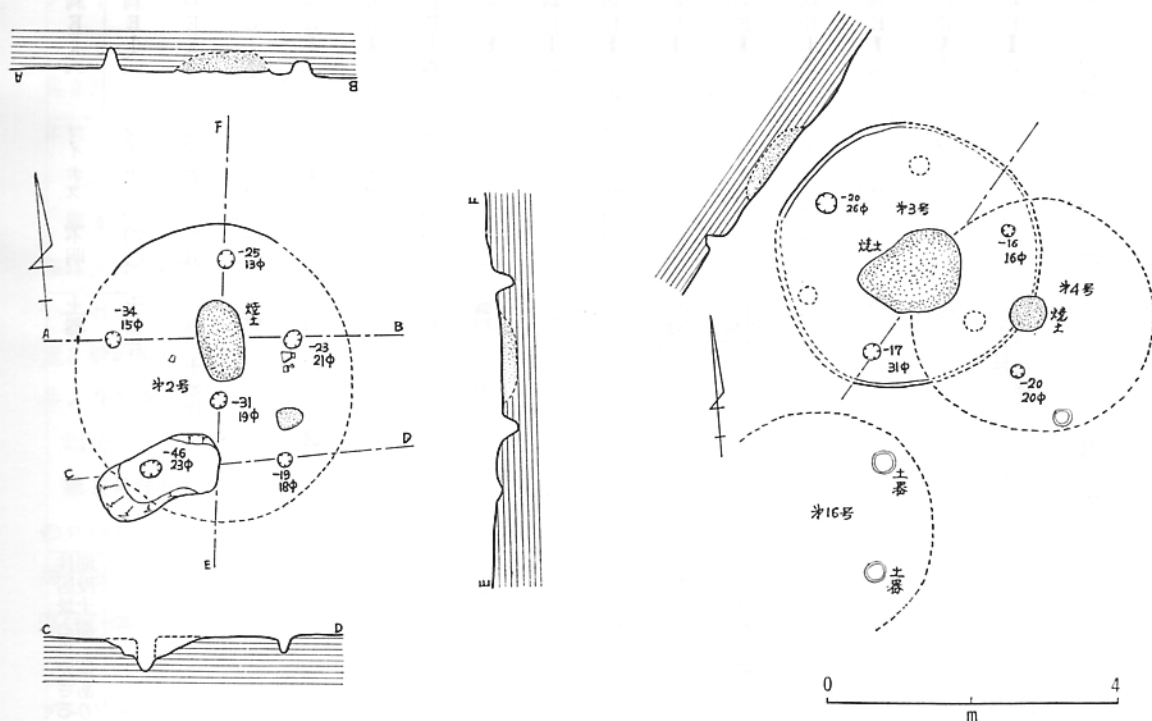
第4図 第1号住居址と第5号住居址実測図

EⅠ式土器をもつばら出土するが、層位的には前者が上、後者が下で重複している。結局同時に存在した住居の数は、そう多いものではなく、前述のような点を考慮に入れても、この集落の最盛期において、大体10軒程度の住居が存在したものと推定される。これらの住居址は第3図に見る如く、北方に口を開き馬蹄形の配置を示しており、中央に広場を有している点、興味深いものがある。古いグループは大体南側に直線状に並んでいるのであるから、前記のように馬蹄形を呈するに至つたのは新しいグループの時期になつてからといえるわけである。

## (2) 住 居 址

個々の住居址についての概要は第1表に示す通りであるが、なお次に若干の説明を加えておこう。

**第1号住居址** 壁は西北側の半分が残っているのみで、東南側の半分は不明であつた。これは西北から東南の方向へ基盤のローム層が緩傾斜しているためで、おそらく上部の黒褐色土層中に壁があつたのであろう。西北側でローム層中の堅穴の深さは20cm、中央部に大きな炉があり、その形状は円形に近い。東西、南北共石囲いの外径で104cm、大小20余個の石塊で周囲を囲み、その中に中心の厚さ28cmにわたつて焼土や炭がつまつていた。石枠の内外には破損した加曾利EⅡ式土器の大形破片が石に密着して立て並べられている点特異であり、当住居址の成立年代を考える有力な資料となつている。また炉の石に混つて、東北側から欠損した石棒を発見した。柱穴は第4図で見ると、確実と思われるものは北側の二つで、あとの大小5つのピットのうち、いずれが仲間か問題である。北側左と南側左は上部の径40cmを超えるやや大きな穴であるが、深さは北側右、南側(-20cm)の場合とつり合いがとれるようである。



第5図 第2、第3、第4、第16号住居址実測図

第1表 住居址の概要

| 住居址番<br>事項 | 第1号            | 第2号        | 第3号        | 第4号        | 第5号           | 第6号                         | 第7号        | 第8号     | 第9号      | 第10号    | 第11号   | 第12号     | 第13号      | 第14号    | 第15号    | 第16号                 |
|------------|----------------|------------|------------|------------|---------------|-----------------------------|------------|---------|----------|---------|--------|----------|-----------|---------|---------|----------------------|
| 状態         | 南半の壁不明         | 壁は北部一部のみ残る | 壁は北と南の一部残る | 壁は北と南の一部残る | 壁は北部のみ残る      | 北半は壁残存                      | 壁は北と南の一部残存 | 焼土のみ残存  | 南北の壁一部残存 | 焼土のみ残存  | 壁は削除さる | 壁はごく一部残る | 焼土のみ残る    | 柱穴と焼土残る | ほぼ完全に残る | 全面削除                 |
| 形          | 円形             | 円形         | 円形         |            | 円形            | 円形                          | 円形         |         | 円形       |         | 円形     | 円形       |           |         | 円形      |                      |
| 大きさ(m)     | 径四・二           | 径四・一(推)    | 径三・六       |            | 径五・〇(推)       | 径五・二(推)                     | 径四・四(推)    |         | 径五・二(推)  |         | 径五・三以上 |          |           |         | 径四・二    |                      |
| 柱穴数        | 4(推)           | 5          | 6(推)       |            | 7             | 5                           | 6          |         | 6        |         | 6(推)   | 6(推)     |           | 6(推)    | 6       |                      |
| 炉の種類       | 石囲い            | 石囲い(破壊)    | 焼土         | 焼土         | 石囲い           | 石囲い                         | 石囲い        | 焼土      | 焼土       | 焼土      | 焼土     | 石囲い      | 焼土        | 焼土      | 焼土      | 焼土                   |
| 複合関係       |                |            | 4号址の上層     | 古3号址より     |               | 15号址より新                     | 6号址より新     |         |          |         |        |          |           |         | 古6号址より  |                      |
| 時期(土器)     | 加曽利EⅠ式         | 加曽利EⅡ式     | 加曽利EⅡ式     | 加曽利EⅠ式     | 加曽利EⅡ式        | 加曽利EⅠ式                      | 加曽利EⅡ式(推)  | 加曽利EⅠ式  | 加曽利EⅡ式   | 加曽利EⅠ式  | 加曽利EⅡ式 | 加曽利EⅡ式   | 加曽利EⅠ式(推) | 加曽利EⅡ式  | 加曽利EⅠ式  | 加曽利EⅡ式               |
| レベル差(cm)   | マイナス六〇         | マイナス一五八    | マイナス二四〇    | マイナス二四八    | マイナス二一〇       | マイナス一二三                     | マイナス二一六    | マイナス一四九 | マイナス二三九  | マイナス二一六 | マイナス〇  | マイナス五四   | マイナス一四〇   | マイナス一九九 | マイナス一四〇 | マイナス 不明              |
| 出土遺物       | 打製石斧、石鏃、石棒、土器片 | 磨石、土器      | 土器片        | 土器         | 打製石斧、石鏃、磨石、土器 | 打製石斧、石鏃、磨石、土器片              | 石匙、土器      | 土器片     | 磨石、土器片   | 土器片     |        | 土器 石皿、磨石 | 土器片       | 石鏃、土器片  | 土器片     | 土器                   |
| 備考         |                |            |            |            | 埋没土器二個あり      | 15号址の柱穴上に石あり<br>北壁に棚状張り出しあり | 炉は二個並列     |         |          |         |        |          |           |         |         | 住居址と推定さる<br>埋没土器二個あり |

(平均 $-24\text{cm}$ )。これを柱穴と考えれば1、2、4、5の4本柱が考えられる。しかしこの場合は二つの大きな穴の説明に困ることになる。1からは土器片と磨製石斧、5からは打製石斧を出しているので、柱の廻りを何かの事情で掘つたのであろうか。石斧は土掘具として使用したことが考えられる。次に3、6も深さが $-23\text{cm}$ 、 $-31\text{cm}$ で適当であるから、これを生かせば1、2、3、6の4本柱がやはり考えられる。けれどもこれでは柱間の形がやや「いびつ」になるきらいがある。そこで今度は7を生かし4と5の間に未発見の柱穴(8と仮定)があるとすれば、1、2、3、8、7の5本柱が考えられる。しかし8とすべき柱穴の存在は承認し難いので、結局は前二者のいずれかで、4本柱と推定するのが妥当ではなかろうか。

出土遺物は打製石斧4、磨製石斧2、石棒1、石鏃4、土器片多数である。

**第2号住居址** 1号址の東方の約30mの地点にあり、長径(南北)4m前後、短径(東西)3.8m前後と推定され、1号址よりやや小さい。北側の壁残存部で堅穴の深さは12cm。中央部よりやや北寄りに大きな炉があり、本来石囲いがあつたが地主が耕作の邪魔で取り除いたという。なお、取り残しの石が数個残っていたが、ブルドーザーにかかつて移動し、付近に散乱していた。炉中の焼土の厚さは約24cm。柱穴は5本であるが、中心よりやや南寄り(炉の南側)にも1本あり、中柱があつたのかも知れない。外周5本柱の柱穴は深さが平均29cmである。

出土遺物は磨石1個と土器片(加曾利EⅡ式)若干。

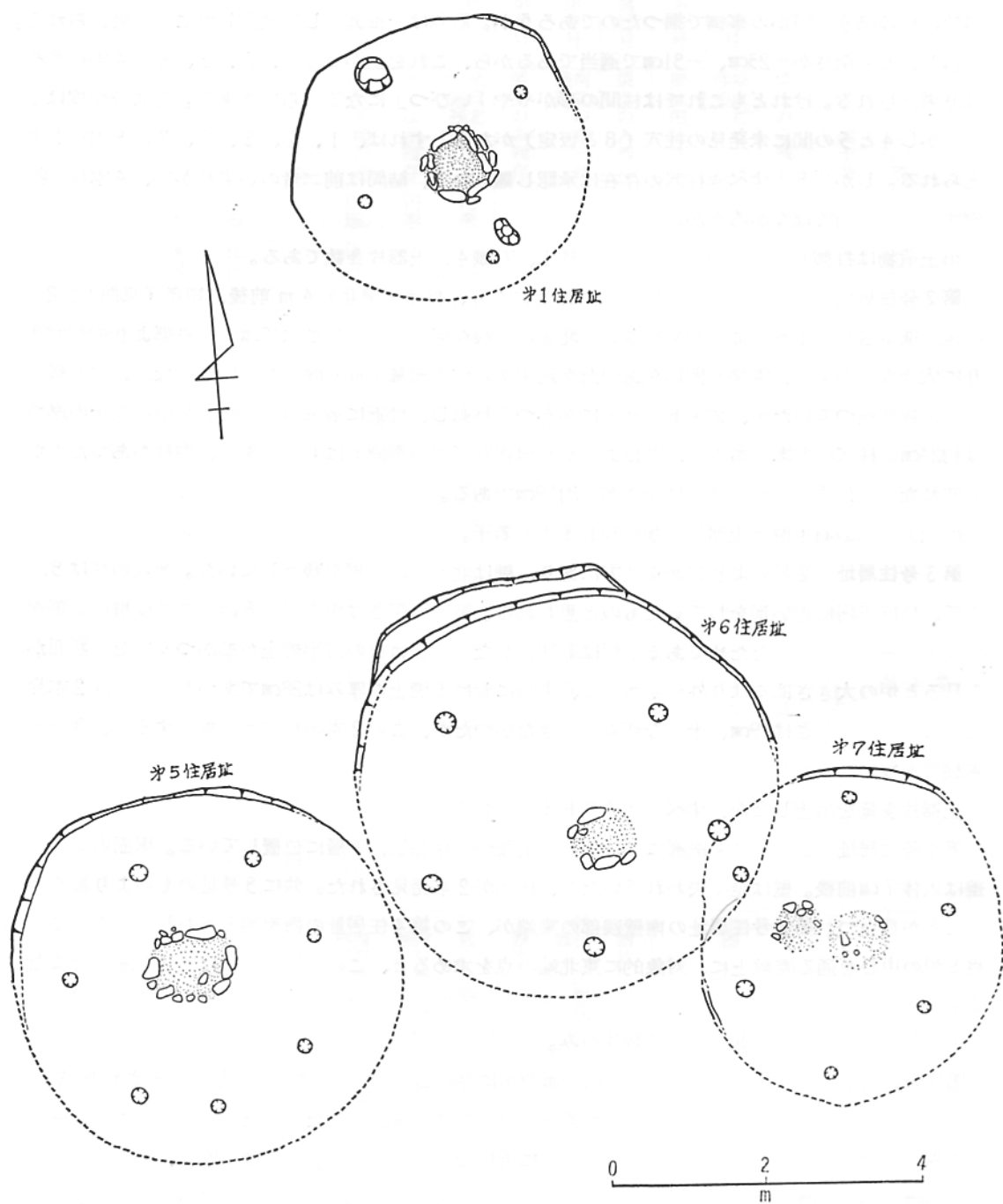
**第3号住居址** 2号址より14m東北方にあり、壁は北と南の一部が残存していた。南北の径は3.6mで、ほぼ正円に近い形をしていたものと思われる。堅穴の深さは現存部で8cm。これは壁の上部をブルドーザーで削除されたためである。炉は石囲いがなく1.2m位の円形焼土が拡がっていた。断面から見ると炉の大きさはやはり外径1m余で、中心における焼土の厚みは28cmであつた。柱穴は2本発見され、平均の深さは29cm、十分な調査ができなかつたが、この2本の柱穴から推定すると、多分6本柱であつたと思われる。

土器片少量を出土したが、すべて加曾利EⅡ式である。

**第4号住居址** 3号址の東南部にほぼ半分が重なつて存在し、下層に位置している。床面のレベル差は大体7cm前後。壁は全く失われていたが、柱穴が2本発見された。共に3号址のものより細く浅いことが目立つ。第3号住居址の南壁残部の東端が、この第4住居址の西南端と思われるので、この点と炉の中心を通る直線上に、対象的に東北端の点を求めると、この住居址の径は大体3.4m位になるようである。

出土した遺物は加曾利EⅠ式土器数片のみ。

**第5号住居址** 1号址より中心距離で約10m西南に存在し、ほぼ満足に近い状態で発掘された。基盤のローム層が南へ向つて傾斜するため、南半分の壁がやはり確認できなかった。堅穴の深さはローム層のみで15cm(北壁寄)。径はほぼ5mの正円に近い形と推定される。柱穴は7本で、その平均値は直径24cm、深さ22cmである。堅穴の中心に石囲いの炉があり、南北80cm、東西88cmの内径を有している。壁の北端と東端にそれぞれ埋設土器があり、いずれも完形土器であつたが、東端のものは上部をブルドーザーで削除され、残部も破損著しかつた。これらの土器はその大きさに合うように床面を掘り、口縁部を上にしてびつたりと埋設していた。このような事例は当時期の遺跡でしばしば見られる現象である。形式は加曾利EⅠ式の特徴を有するが、他の土器片の大半は加曾利EⅡ式に相当するも



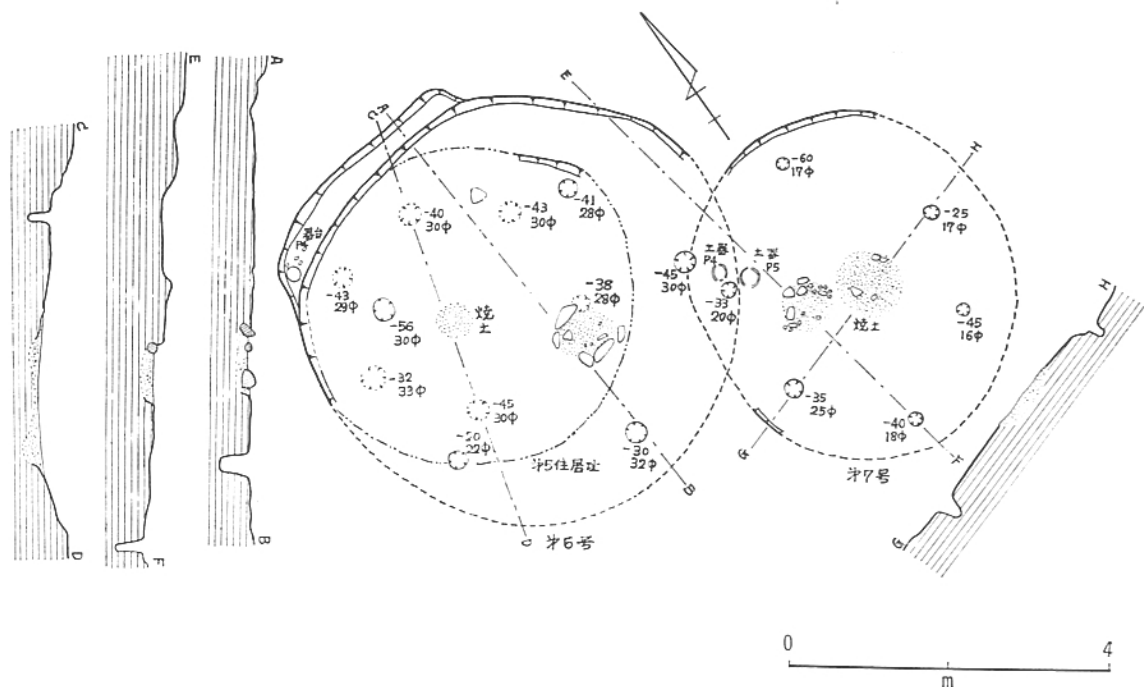
第6図 第1、5、6、7号住居址の平面的関係

のであり、時期の主体は後者におくことができよう。

出土遺物は打製石斧7、磨製石斧(残欠)1、石鏃1、石棒残欠1、磨石(小型)1、復原可能土器2。

**第6号住居址** 5号址の発掘中にその東北隣より発見され、壁面を追っているうちに、直径5.4mと推定されるやや大きな円形のプランを得たわけである。この場合も北半のみで、南半はブルトーンによって削られたため壁線を知ることは不可能であつた。しかし基盤に残っていた柱穴の位置より推して、相対的にそのプランを推知することは可能である。堅穴の深さはローム層のみで20cm。柱穴は5本で平均値は直径28.6cm、深さ38.4cmで、やや巾広く深いものである。炉は石囲であるが堅穴の中央部よりかなり南に偏在している。東側には石塊が発見されなかつたが、このような例は他にもあり、あるいは住居の入口が東側にあつたことを示す一証かも知れない。南北の炉巾は内径で48cmである。炉内をはじめ床面より発見される土器片は、すべて加曾利EⅠ式土器であり、近接する第1、第5、第7各住居址よりも、古い時期のものである。またこの住居址の大きな特徴として、北側に柵状の細長い張り出しがあり、その西隅に勝坂式土器の面影を残すような文様手法をもつ、台付土器の台部が残存していた。柵と台付土器という特殊な組み合わせは、住居の北側という位置とも考え合せ、何か重要な意味を持っているように思われる。この柵はレベルで調べると、ローム上面より19cm切込んで存在し、さらに住居の床面とは10cm上つている。但し当住居址は壁側はやや深く、中央部に向つて床がやや上昇しているので、住居の中心部との対比では7cmしか上つていないことになる。他の住居址には全く見られないこの柵状の張り出しの存在は、あるいは、この時期のこの集落の首長または司祭者の住居とも疑われるのである。

住居の西南部に2ヶ所大きなピットがあるが、その底から当住居址の柱穴残部が発見されたり、また加曾利EⅠ式と加曾利EⅡ式の土器片が混在して発見された点など、後世の掘穿によるものと推定



第7図 第6、第7、第15号住居址複合状況実測図

される。なおこの2形式の土器の混在という現象は、この西南部が加曽利EⅡ式期の第7住居址と、重複する位置にあるため生じたものと思われる。

さらに検討を加えると、この住居址は炉の附近を除き、完全なローム面が見当らず、床面の大半はローム質土壌を主としながらも、暗褐色土壌を若干含む状態にあつた。そこでこれを剥ぎとつて見ると、下から全く別個の、しかもやや小さな竪穴住居址が発見されたわけである。これが第15号住居址で、時間的に先行することは証明(15号址参証)されたが、土器形式がほとんど同一の点、同じ加曽利EⅠ式期に第6号址が立て直されたものと一応推定される。

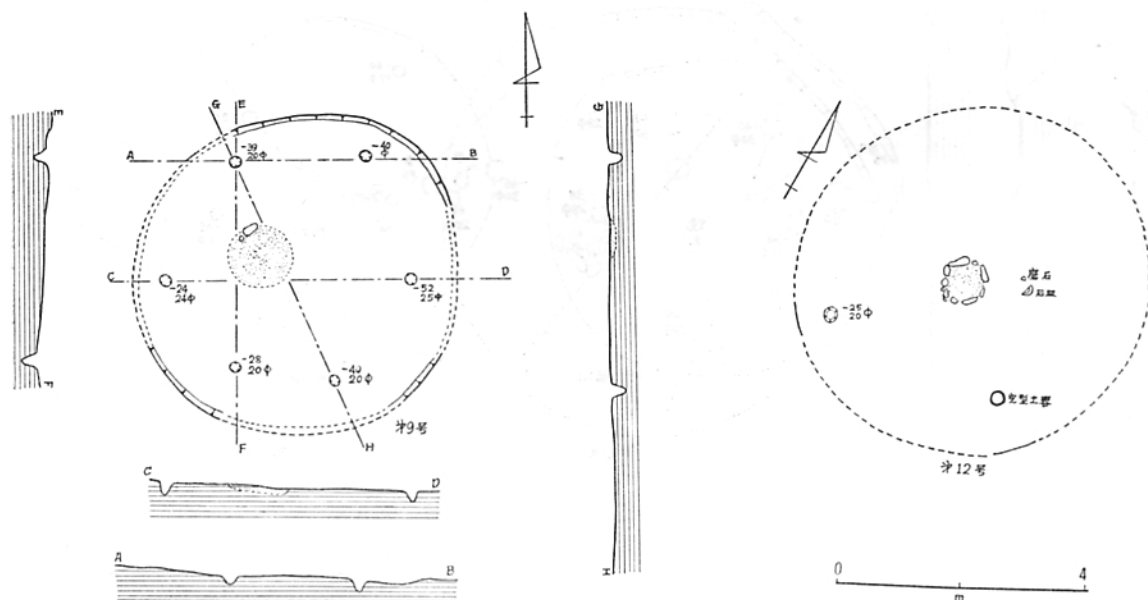
第6号址よりの出土遺物は、打製石斧4、磨石1、土器片多数である。

**第7号住居址** 6号址の西南部に一部が重なつて存在し、北部と西部に壁の一部が残存するので、これと6本の柱穴を参考にして、プランを復原すると、南北4.4m、東西3.8mでやや楕円形になるようである。北側の壁でロームの切り込みは12cm。

炉は竪穴のほぼ中央部にあるが、東西に二つ並んで発見され、西側のものはやや多くの石塊により焼土が囲まれていたが、東側のものは石塊が若干少なく、焼土は外方へ拡がっていた。当初は西側のみが発見され、そのまま住居址全体の写真撮影が行われたが、その後東側の炉が床面をやや剥いた時に発見され、注目されたわけである。結局東側の炉の方が先行するよに思われるが、二つの炉内より発見された土器片はいずれも加曽利EⅡ式であり、おそらく東側のものが最初作られたが、やがて新しい炉が作られたために埋没されたものと思われる。この場合東炉の方が竪穴のほぼ中心にあり、西炉がやや西に偏在している点、おそらく住居の入口が東側にあつたために、出入の都合も考えて西へ移されたものとも解せられる。6本の柱穴の平均値は直径20.5cm、深さ39.6cmである。

北西隅より、口縁部のみ残した2個の土器が発見された他、大小の破片が床面に残存していた。石器は横型の石匙1個が北側の6号址寄りで見つかったのみである。

**第8号住居址** 7号址から東方へ15m近く離れて存在し、ブルドーザーによりほとんど破壊されて



第8図 第9、第12号住居址実測図

しまった。炉は焼土のみで石囲いはなく床面も厚く剥がれてしまったため、壁や遺物の調査は不可能に近かった。一応柱穴の調査を予定したが、結局調査期間が短かつたため手が届かず、残念ながら見捨ててしまったものであるが、炉の存在状況からみて、住居址であることは間違いない。ブルドーザーによる削土や、炉辺から採集された若干の土器は、いずれも加曾利EⅠ式土器で、黒耀石の破片も散乱していた。

**第9号住居址** 8号址の東南10mの地点にあり、建設省の山田繁治氏が発見し、その後長田、小野等により発掘されたもので、壁は北側の大半と、東南側の一部が検出された。上部が削られており、ロームの切り込みは残存部で8cmあつた。炉はやはり中心より西偏しており、西北隅に石塊2個が存在したが、他には存在した形跡もなく、厚く焼土の堆積しているものが特徴であつた。その規模は直径1m強、厚さ28cmであつた。床面の広さは径5.2mの正円に近く、本遺跡ではやや大きな部類に属するものである。

柱穴は6本で、その平均値は直径23.6cm、深さ18cmである。

出土遺物は磨石1（柱穴内出土）、石鏃1、土器片若干、土器片は加曾利EⅠ式的様相をもつものもあるが、主体は加曾利EⅡ式土器のようである。

**第10号住居址** 第8号址の西北8mのところであり、第8号址同様ブルドーザーによる破損著しく、僅かに炉址と柱穴2個を認めたのみ。十分な調査はできなかつたが、炉は石囲いのものでなく、出土遺物は加曾利EⅠ式土器若干。

**第11号住居址** 第1号址の北方10m余の地点にあり、当集落址の中では最も高い位置に存在している。やはりブルドーザーにより壁はもとより床面まで削られ、炉址と柱穴4本を知り得たのみ。しかし調査された柱穴の配置から見ると6本柱であることは間違いなく、堅穴の形態は東西にやや長い楕円形と推定される。その長径は5.3mを下らないものであろう。柱穴の平均値は残存部において、直径22.8cm、深さ20.2cm。炉址は中央よりやや北寄りで、焼土のみ。南北76cm、東西84cmの楕円形。出土遺物は土器片のみ（加曾利EⅡ式）。

**第12号住居址** 11号址の北西16mの地点にあり、発見が遅かつたため完全な調査はできなかつた。しかし石囲いによる炉址と、柱穴1本を検出し、さらに南部で壁の残存部と思われるものを1点認めたので、これより推定される住居の大きさは、やはり5m以上の径を有するものと思われる。炉は直径75cmのほぼ円形に近いもので、焼土や炭化物が入っていた。柱穴は直径20cm、深さ25cm。

床面より多くの土器片や黒耀石片が出土したが、特に炉の東側から磨石と石皿のそれぞれ残欠品が1点ずつ、また南壁近くから完形土器1個体分が発見された。時期は加曾利EⅡ式、但し加曾利EⅠ式的手法をもつ土器片も若干出土。

**第13号住居址** 第10号址の約11m東方に位置し、これもブルドーザーによりほとんど失われ、炉の下部が僅かに残存していた。この住居址の北辺に1本の樹木が残存していたが、その地点のみ工事前の表土が残っており、計測すると、表面からローム層までの黒褐色土層（表土）が40cm、さらにローム上面から当住居址の炉の下底部までがやはり40cm。つまり80cmも削除されていたわけである。焼土の厚みが10cm位あつたとしても、当住居址の床面は地表から70cmのところ、1号、5号、6号、7号などの西方住居址群に比べ、やや表土の堆積率が大であつたようである。

出土遺物はこの樹木付近から得られた少量の土器片で、加曾利EⅠ式土器片のみである。

第14号住居址 3号址の北方14mのところにあり、これも上面を削除されて、僅かに炉址の下部と柱穴2本を得たのみ。壁も西側の一部が一応認められたが、これらより推定する竪穴の径は4.5m以上である。柱穴の平均値は上径20cm、深さ18cm。

出土遺物は加曽利EⅡ式土器片少量と、黒耀石片、石鏃1個（石英質）である。

第15号住居址 既述した如く第6号址の下部から発見され、そのレベル差は27cmである。石囲いのない焼土の詰つた小さな炉を中心に、円形を描いて6本柱があり、その1本は6号址の炉石を除去した下から発見された。したがって当住居址が6号址よりも古いことは明らかである。西北部の壁面が6号址のものにほぼ一致しており、東北部の壁は一部6号址内より発見されているので、規模は6号址よりもずつと小さい。推定では東西4.4mで、ほぼ正円に近いものと思われる。柱穴の平均値は上径30.1cm、深さ40.1cmで、第6住居址同様、加曽利EⅠ式期の住居址は平均して柱穴が大きい。（4号8号、10号、13号、等は床面削除のため正数値不明）。

出土遺物は加曽利EⅠ式土器片が多量で、他はない。

第16号住居址 これは確実に住居址と断定できるものではないが、九分通り存在が間違いないと思われるものである。第3号址の直ぐ西南隣に位置し、復原可能の埋没土器2点を出土している。本遺跡の発見当初長倉氏により掘り出されたもので、やはり地中にピッタリ埋没していたものである。周縁の調査が十分でしなかつたが、5号址の例から見ても住居址の存在したことは間違いなからう。ブルドーザーによる削除著しく炉址等も失われたものと思われる。土器は加曽利EⅡ式。

## 5. 出土遺物

本遺跡よりの出土遺物は、石器と土器のみであるが、その数量は比較的多い。前項でも住居址別に出土遺物を掲げたが、ここではその種別にさらに詳細に観察して見たい。

### 一 石 器

石器としては打製石斧23、磨製石斧5、石匙1、石鏃12、磨石4、凹石1、石棒2、石皿5の合計53点である。このうち住居址内から確実に出土したものの36点、表面採集によるもの17点である。

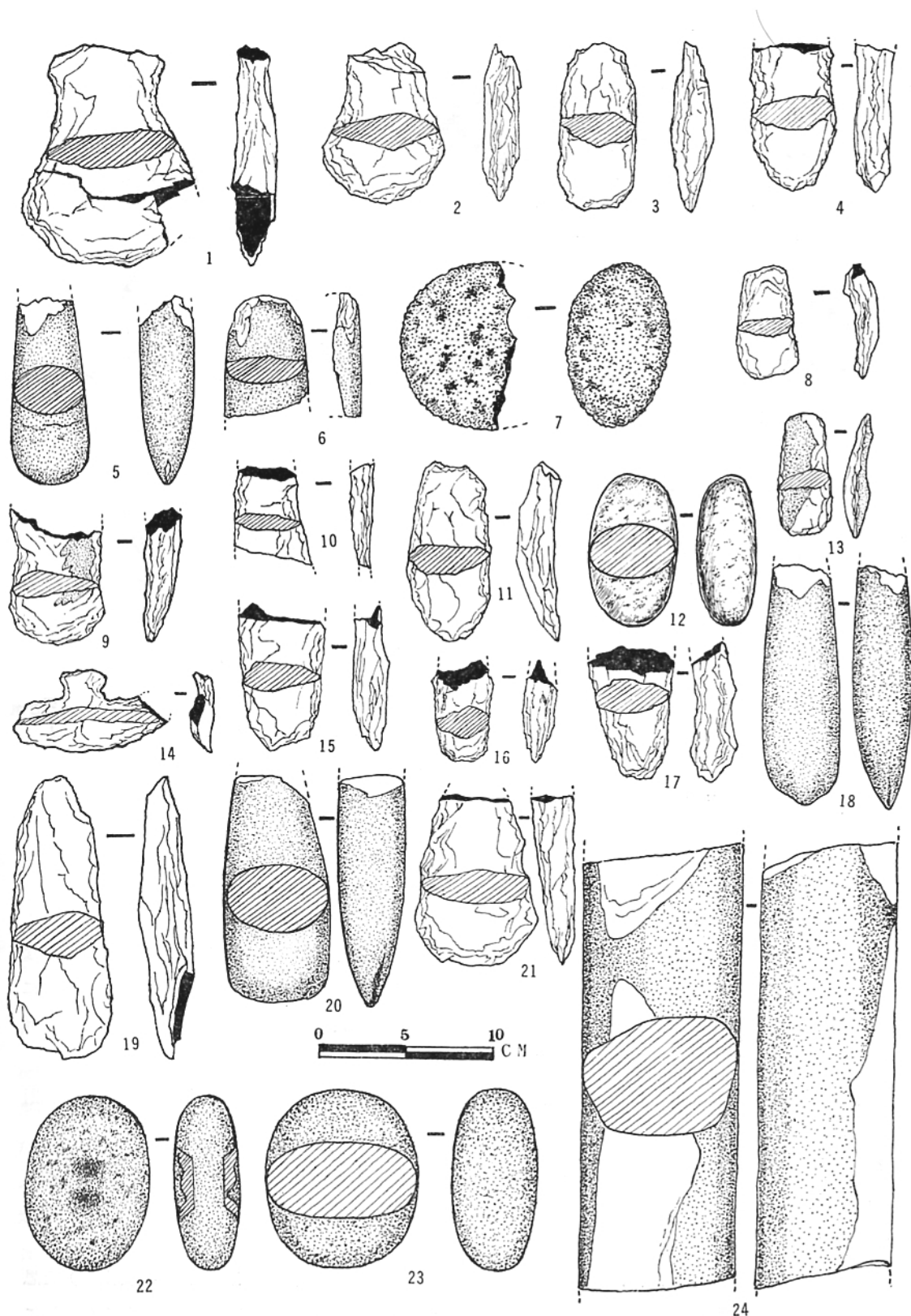
#### イ、打製石斧

23点のうち第9図に紹介したものは14点であるが、すべて安山岩である。この点は図示されないものにも共通している。1～4は第1住居址内より出土し、そのうち1は炉脇、2は柱穴内、3、4は床面より発見されている。1は分胴形であるが頭部が欠け、2は撥形、3、4は短冊形である。

8～11は第5住居址出土で、すべて床面の南部から出土している。10は撥形とも思われるが、他は大体短冊形に属するものである。9は半分、10は上下

第2表 各住居址別出土遺物一覧表

| 住居址  | 打製石斧 | 磨製石斧 | 石匙 | 石鏃 | 磨石 | 凹石 | 石棒 | 石皿 | 復元土器 |
|------|------|------|----|----|----|----|----|----|------|
| 1号址  | 4    | 2    |    | 4  |    |    | 1  |    |      |
| 2号址  |      |      |    |    |    |    |    |    |      |
| 4号址  |      |      |    |    |    |    |    |    | 1    |
| 5号址  | 7    | 1    |    | 1  | 1  |    | 1  |    | 2    |
| 6号址  | 7    |      |    |    | 1  |    |    |    |      |
| 7号址  |      |      | 1  |    |    |    |    |    |      |
| 9号址  |      |      |    | 1  | 1  |    |    |    |      |
| 12号址 |      |      |    |    | 1  |    |    | 1  | 1    |
| 14号址 |      |      |    | 1  |    |    |    |    |      |
| 16号址 |      |      |    |    |    |    |    |    | 1    |
| 表面採集 | 5    | 2    |    | 5  |    | 1  |    | 4  |      |
| 合 計  | 23   | 5    | 1  | 12 | 4  | 1  | 2  | 5  | 5    |



第9圖 出口遺跡出土石器実測図